



好きであること、楽しむこと

学校長 井川 勝博

「これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず。」

孔子の言葉です。意味は、「(学ぶことにおいて) そのことの知識があるということは、そのことを好きな人間にはかなわない。そのことを好きな人間は、そのことを楽しんでいる人間にはかなわない。」ということだそうです。「物事を上達させるには、楽しむことが一番ですよ。」ということなのでしょう。好きなことは自然に上手になっていくという意味の「好きこそもの上手なれ」ということわざもあります。ただ孔子の言葉の上では、好き<楽しむ ということなのでしょう。ここで、「好き」と「楽しむ」の違いについて詳しくは語りませんが、ただ、好きになったり、楽しみながらやっていることが、上達につながる、ということは、わかるように思います。とにかくやらないといけないから、と、否応なしにやり始める、ということもあるでしょう。そういう始まりであっても、やっていくうちにその楽しさに虜になってしまっている、ということだってあるかもしれません。

ある本には、この孔子の言葉について、こういうことが書かれていました。

「【何事でも、始めはイヤイヤでも努力してやっていくうちに、それが好きになるものである。そして好きでやっているうちにそれが楽しくなってくる。何事も、それが好きになるまでは投げ出さないで続けること。はじめから楽しんでやれるようにはいかない。】というウラの言葉もあるそうです。」上達のために好きになるように楽しくなるようにとことんやり続けなさいということなのでしょう。

わたしは数学の教師として生徒たちに、「数学」を「数楽」と考えてほしいとよく言ってました。単に「学ぶ」より、どうせやるんだったら「楽しみ」ながらやっていきましょう、ということです。数学の楽しさについて問うと、多くの生徒は「出した答えが正解だったとき」と答えてくれるのです。でも、本当の楽しさは「考えているとき」なのかもしれないとわたしは思ったりします。難易度の高い問題ほど正答を出すと嬉しいのはそういうことなのかなと思うからです。何が楽しいのか、どんなことが好きなのか、それは人それぞれなのかもしれません。

「好き」ということについて、「おでんの食べ方」という興味深い話もありますので最後に紹介します。

『おでんのお皿の中に、ちくわ、大根、こんにゃく、じゃがいも、たまごの5種類のものが入っています。このおでんの食べ方には典型的に「好きな物」から食べる、「嫌いな物」から食べる、の2種類に分かれるそうです。おもしろいのは、「好きな物」から食べる人のある考え方です。5品のうち、一番好きな物を食べれば、4品残ります。そのうち一番好きな物を食べれば、3品残ります。その中から一番好きな物を食べると・・・と。こう考えるといつも一番好きな物を食べていることになる。』そうです。どうでしょうか。好き嫌いとなると人それぞれの感情です。それでも考え方ひとつでそのものを好きになることができるのかもしれません。

【表彰関係】 おめでとう

春季大会 女子バスケットボール部 優勝

女子ソフトテニス部 学校対抗戦 第3位